

座長：羽鳥 基明（群馬大院・医・泌尿器病態学）

3. 上顎癌切除後の瘢痕収縮による口唇変形に対する分層植皮術の応用

高野 美萌，茂木 健司，飯村 一弘

山口 元史，石原 宏一，清水 岳志

神野 恵治，狩野 証夫，笹岡 邦典

根岸 明秀（群馬大院・医・顎口腔科学）

上顎歯肉癌の手術療法では、安全域を考慮すると上唇、頬部の粘膜を含めて切除せざるを得ない場合が多い。その結果、術後の瘢痕収縮により上唇がつり上がり、口裂閉鎖不全を生じ、當時、前歯が露出する状態となるため、患者は審美的障害、口腔乾燥感および摂食・咀嚼障害を訴える。これらの障害を改善する目的で、上唇部から頬部の粘膜側に分層植皮術を行うことにより、上唇変形の審美的、機能的回復が可能となった症例を経験したので報告する。

対象は上顎癌切除術施行後の上唇醜形の 2 例である。術式は、上唇粘膜に横切開を加え、充分に粘膜側を伸展させ、生じた raw surface に大腿伸側から採取した中間層植皮片を縫合し、タイオーバー法により固定する。本術式は侵襲が少なく、手術時間も約 1 時間と短い。術後半年経過した現在、2 例とも口裂閉鎖不全は改善し、審美的にも機能的にも満足すべき結果である。

4. 当科における生体肝移植症例の検討

荒川 和久，須納瀬 豊，大和田 進

竹吉 泉，川手 進，堤 裕史

浜田 邦弘，森下 靖雄

（群馬大院・医・臓器病態外科学）

笠原 群生

（京都大医・附属病院・移植外科）

肝移植は末期肝疾患患者の救命治療として定着してきた。当科ではこれまで、11 例の末期肝疾患患者に生体肝移植を行なってきた。今回その 11 例についてのまとめを報告する。レシピエントは平均年齢 56 歳、男女比は 6:5、原疾患はウイルス性肝硬変 10 例 (HBV 1 例, HCV 9 例、内 HCC 合併 6 例)、PBC 1 例。術前状態は Child -Pugh class A 1 例、B 5 例、C 5 例、MELD score 平均 14 点。手術は右葉グラフト 10 例、左葉グラフト 1 例、平均手術時間 11 時間、平均術中出血量 5800ml。平均入院期間 49.5 日。急性拒絶反応は 3 例に 3 回認められ、全てステロイドパルス療法にて軽快。平均観察期間 16 か月で 9 例生存中である。ドナーについては平均手術時間 5 時間 44 分、平均出血量 336ml、平均入院日数 14.6 日で、合併症は胆汁瘻を 2 例に、一過性の胃排出遅延を 1 例に認めたが保存的に軽快。肝移植術は末期肝疾患患者に対する救

命治療として有効である。

特別講演

座長：三國 雅彦（群馬大院・医・脳神経精神行動学）

生体肝移植患者の精神医学的・心理社会的諸問題

野間 俊一，林 晶子

（京都大医・附属病院・精神科神経科）

演者は、1999 年に京都大学医学部精神科神経科に赴任して以来、当大学移植外科と連携をとって肝臓移植レシピエントおよびドナーの心理的サポートを行ってきた。非常に限られたものではあるが、そこでの演者の経験を中心に、おもに生体肝移植をめぐる移植患者の心理について述べてみたい。

精神医学的側面としては、移植術前のレシピエントで「潜在的肝性脳症」の鑑別が必要となる。また先天性肝疾患患者では社会適応に問題を抱えていることも少なくはない。移植術後には、いわゆる術後せん妄と免疫抑制剤の副作用としての脳症や CPM を鑑別せねばならない。このように、まず意識障害を見分けることが重要である。

心理社会的側面を見ると、まず誰をドナーにするのか、というドナー選定問題が挙げられる。レシピエントがドナーに対する負債感を強く持つ場合、術後の身体的経過が良好にもかかわらずなんらかの精神障害を来たす「逆説的精神症状」(福西) が生じやすいといわれる。また、レシピエントの心身の状態がドナーの状態に左右されるという「シャム双生児効果」(Muslin) もさまざまな程度で見られる。ドナー選定問題は、当のドナーにとってはさらに重大である。レシピエントの命がかかっているとはいえ、ドナーになることで身体的苦痛や社会的損失は避けられず、決断にはかなりの勇気が必要である。移植手術がうまくいったとしても、ある種の喪失感を体験するドナーは稀ではなく、術後になんらかの後遺症が残った場合には、レシピエントに対して強い葛藤を抱くこともある。ドナー候補でありながら結局ドナーにはならなかつた、いわゆる「ノンドナー」も、後ろめたさなどに悩まされる可能性がある。

移植医療は、まずレシピエントが移植以外では生きることができないという絶対的状況があり、そのレシピエントを助けることができるドナー候補者は限られている。つまり、レシピエントもドナーも、主体的な判断を下すことが容易ならざる特殊な事態に身をおくことになる。このことは、レシピエントもドナーも概してなかなか苦痛を訴えないという傾向にも現れている。移植医療